

回復期リハビリ病棟における患者 ADL の効果的な情報共有の手段

－ピクトグラムを導入して－

田中敦子^{1)*} 西田由紀子¹⁾ 山口里美¹⁾ 東口亜耶¹⁾ 三木志津香¹⁾ 田中洋子¹⁾
小林里美¹⁾ 戸野佳子¹⁾

1) 国立病院機構鳥取医療センター看護部 12 病棟

Approaches to effectively share information about patients' ADL on a convalescent rehabilitation ward

-Introduction of pictograms-

Atsuko Tanaka^{1)*} Yukiko Nishida¹⁾ Satomi Yamaguchi¹⁾ Aya Higashiguchi¹⁾ Shizuka Miki¹⁾
Yoko Tanaka¹⁾ Satomi Kobayashi¹⁾ Keiko Tono¹⁾

1) The 12th Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center

*Correspondence: byoutou12@tottori-iryu.hosp.go.jp

要旨

回復期リハビリ病棟では、毎日のように新規入院があり、患者の日常生活動作（ADL）に関して多職種間での簡便かつ迅速に理解可能な情報共有のツールがないためか、患者の ADL や転倒転落などのリスク情報の共有が不十分なまま、多職種スタッフが介入している現状があった。そこで本研究では、ピクトグラムを導入することにより、入院患者個々の ADL について速やかな判断が要求される移動、移乗、排泄の方法を的確に共通認識できるか否か、つまりピクトグラムが即時に情報を共有できるツールとして有効かどうかを検証した。特に病棟スタッフはピクトグラムが情報を共有するツールとして有効であり、介助方法が分かりやすくなったと考えているが、リハビリスタッフは必ずしもそうは思っていないことが判明した。また、患者の ADL を迅速かつ的確に認識するツールとして有効と考えている病棟スタッフさえも、介助の方法で不安が依然としてあり、ピクトグラムの表示が患者の ADL の現状に合っていないと答えている。表す内容の正確さ、実際の ADL との合致性という点で、ピクトグラムという絵文字が持つあいまいさをできるだけ少なくするように、改良の余地がある。鳥取臨床科学 6(1), 23-28, 2014

Abstract

In Hospital A, new patients are admitted to the convalescent rehabilitation ward on a daily basis. Owing to a lack of tools allowing healthcare providers from different fields to easily and promptly understand and share information on patients' activities of daily living (ADL), and on the risk of falls among them, these providers have performed their duties without sufficiently sharing such information. Against this background, the present study aimed to determine whether pictograms can help healthcare providers to appropriately understand each inpatient's ADL (transfer, excretion, and moving between their wheelchair and beds), for which a prompt

judgment needs to be made; in other words, whether pictograms are effective to allow these providers to share necessary patient information promptly. As the results, ward staff considered pictograms to be effective for sharing necessary patient information and promoting their understanding of assistance required by patients. In contrast, some rehabilitation staff members did not consider them to be useful. In addition, some ward staff members reported that, as pictograms did not necessarily represent patients' current ADL, they were uncertain about the ways in which they should assist such patients. There is a need to improve pictograms in a manner so that what they represent is consistent with patients' actual ADL. *Tottori J. Clin. Res.* 6(1), 23-28, 2014

Key Words: ピクトグラム, 日常生活動作 (ADL), 多職種共通認識, 回復期リハビリ病棟; pictograms, activities of daily living (ADL), common interprofessional awareness, convalescent rehabilitation ward

はじめに

A病院B病棟は, 脳血管疾患, 骨折後の回復期リハビリ病棟である。毎日のように新規入院があり, 患者の ADL や転倒転落などのリスク情報の共有が不十分なまま, スタッフが介入している現状がある。また, 一人の患者に複数の他職種スタッフが関わり, 情報の共有が難しくなっている。そのため, 情報不足のまま患者に関わり, 患者に危険や不安を与えてしまうことがある。患者は, 自分にとって必要な援助をどの多職種スタッフからも受けられるべきである。

このような状況が生まれた理由の 1 つとして, 患者の ADL に関して, とくに速やかに判断することが要求される動作に関して多職種スタッフ間で簡便かつ迅速に理解可能な情報共有のツールがなかったことが考えられる。今回, 全スタッフが個々の患者の ADL を迅速に理解し, 患者に合った適切な介入が行えることを目的にピクトグラムを導入し, 情報共有のツールとして有効であるか検証した。

用語の定義

ピクトグラム: 日本語で“絵文字”とか“絵ことば”と呼ばれるグラフィック・シンボルのこと。

I. 研究目的

ピクトグラムが患者個々の移動, 移乗, 排泄の方法を, 的確かつ即時に把握するツールとして有効かどうか, スタッフに対し, ピクトグラム導入前後でアンケートを行って, その結果をもとにピクトグラムの有効性を明らかにする。

II. 研究方法

1. 研究期間: 平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月末。
2. 研究対象: B 病棟で勤務する看護師 19 名, 看護助手 5 名, リハビリスタッフ 25 名, 合計 49 名で, 研究に対して全員から同意が得られた。
3. 調査方法
 - 1) アンケートの実施: ピクトグラムを導入する前に, 現在の患者の移動, 移乗, 排泄の方法についての情報収集の方法と, 介助時の不安の有無や, 情報収集する際の不便さの有無について, 対象者へアンケートを実施した。
 - 2) ピクトグラムの活用: 8 月～9 月の 2 ヶ月間にリハビリ目的で入院していた 70 名について, 患者情報をピクトグラムで表示してスタッフ間で情報共有を行った。対象となる患者には, 家族を含めて, ピクトグラムを掲示する目的・意図を説明し了解を得たうえで行った。